

第7部 (3) 追及 第三者委発足 深刻なずれ

不信は頂点に達した。

2012年6月16日、仙台市の仙台弁護士会館。石巻市大川小で6年の次女みずほさん=当時(12)=を亡くした佐藤敏郎さん(54)ら8遺族11人が記者会見を開いた。全員が会見は初めてで、意を決して石巻市教育委員会の姿勢を広く問うた。

「安全なはずの学校で、なぜ多くの子どもが亡くなったのか。きちんと説明してほしい」

引き金は、情報開示請求で明らかになった「引き渡し中に津波」との文書だった。震災5日後の11年3月16日、当時の校長柏葉照幸氏が市教委に報告したと記載されている。大川小関連の文書とは別に、各学校の被災状況をまとめたファイルにとじられていたとの理由で、1年3カ月余り開示されなかった。

市教委は「被災1分前に移動を開始し、避難途中で津波に遭った」と説明してきた。「引き渡し中」なら校庭にとどまっていたことになる。明らかな矛盾に、遺族は「避難ではなく、津波が来たから逃げただけではないか」(佐藤さん)と指摘した。

柏葉氏は市教委を訪れる前日、唯一生き残った男性教務主任(57)からメールを受け取ったとしている。その内容が反映されたとみるのが自然だ。しかし、柏葉氏は遺族会見後の説明会で「避難所が河北総合支所で誰かから側聞したと思う」と、真偽も出所も曖昧に言葉を濁した。



検証委の初会合に先立ち、大川小の被災校舎を視察する委員ら=2013年2月7日、石巻市釜谷

検証の歩みは遅々として進まなかった。11年6月の第2回説明会で、市教委が「津波襲来12分前」と説明した避難の開始時刻が、最終的に「1分前」に修正されるまで震災から1年近くを要した。担当者が2人とも12年4月の定期異動で代わり、遺族はまた一から説明を強いられた。

同3月の第4回説明会終了後の記者会見で、市教委は第三者委員会の設置検討を表明した。「専門家の意見も踏まえてやっていくしかない」との遺族の要望を受けたものだが、内実は深刻なずれがあった。

「前例のない事故。みんなが知恵を出し合い、悩んで話し合っていきたい」

佐藤さんらが繰り返し訴えたのは、遺族と市教委、県教委、文部科学省、専門家らが膝を突き合わせて議論を続けることだった。市教委は当初から外部委託を掲げ、「客観的な検証作業」「第三者による公正な立場からの検証」と繰り返した。

「丸投げではないか」

遺族が懸念する中、市は同6月、検証委設置に関する事業費2000万円の予算案を議会に提出した。佐藤さんら有志が担当者と重ねた折衝が、「第三者検証に向けた打ち合わせ」にすり替えられた。

文科省が主導した委員の人選では、遺族が「市側に近い」と反対した候補1人が外された。事務局トップと委員が親子関係にある点も疑問が噴出した。遺族や遺族推薦委員の参加は認められなかった。

13年2月、大学教授や弁護士ら委員6人、調査委員4人で検証委が発足した。委員長に選任された室崎益輝・兵庫県立大大学院減災復興政策研究科長は、初会合後の記者会見で「検証の原点は犠牲者と遺族に心を寄せること。疑わしいことは取り上げて教訓としたい」と意気込みを語った。

なぜ児童74人は亡くなったのか。震災から約2年、追い求めた真実を明らかにしてほしい。遺族は信じるしかなかった。